

人文科学研究所

I 研究の水準 研究 20-2

II 質の向上度 研究 20-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 発表論文数は、平成22年度の128件から平成27年度の314件となっている。また、平成22年度から平成26年度にかけて単著82件、共著を含む編著88件を刊行・発表し、日本学術振興会賞、日本建築学会著作賞等を受賞している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の競争的資金の採択件数は33件から40件の間を推移しており、合計で225件となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 共同研究は研究班を組織して実施しており、各班における議論とフィールドワークにより研究成果を公開している。例えば、第一次世界大戦の総合的研究班の『現代の起点 第一次世界大戦』、雲岡石窟の研究班の『雲岡石窟』の再版と中国語版の出版、漢簡語彙辞典の出版班の『漢簡語彙——中国古代木簡辞典』、近代古都研究班の『近代日本の歴史都市——古都と城下町』等がある。
- 第2期中期目標期間の共同研究班参加者数は延べ10万人を超え、外国人研究者、若手研究者、大学院生、女性研究者も多数参加している。
- 平成22年度から平成26年度の拓本文字データベースや東洋学文献類目等の公開中のデータベースの利用アクセス数は、平均3,700万件以上となっている。

以上の状況等及び人文科学研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を大きく上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に史学一般、アジア史・アフリカ史、文化人類学の細目において卓越した研究成果がある。また、研究所の研究目的に即して、人文学の諸分野において優れた研究成果がみられる。

- 卓越した研究業績として、史学一般の「第一次世界大戦の総合的研究」、アジア史・アフリカ史の「中国古代刑罰制度史の研究」、文化人類学の「表象による「人種」の社会的リアリティ構築のメカニズム解明」がある。そのうち「中国古代刑罰制度史の研究」は、平成 23 年度に第八回日本学術振興会賞を受賞し、「新たな東洋古代史像がここから生まれる可能性があり、今後の展開が大いに期待される」との評価されている。また、文化人類学の「表象による「人種」の社会的リアリティ構築のメカニズム解明」は、文理融合アプローチによる国際共同研究であり、医療倫理に関する国際誌に掲載された論文がアクセス上位論文に認定されている。
- 社会、経済、文化面では、特に文学一般、史学一般の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、文学一般の「漢文と東アジア」、史学一般の「20 世紀の食と農の思想史」がある。特に、「漢文と東アジア」は、訓読を広く東アジア漢字文化圏の観点から再検討し、単なる漢文の読み方としてだけでなく、国家観、世界観と結びつけた新たな視座を示した点が評価され、2011 年度角川学芸賞を受賞している。

(特筆すべき状況)

- 卓越した研究業績として、「第一次世界大戦の総合的研究」、「中国古代刑罰制度史の研究」、「表象による「人種」の社会的リアリティ構築のメカニズム解明」があり、そのうち「中国古代刑罰制度史の研究」は、平成 23 年度に第八回日本学術振興会賞を受賞し、「新たな東洋古代史像がここから生まれる可能性があり、今後の展開が大いに期待される」と評価されている。

以上の状況等及び人文科学研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、人文科学研究所の専任教員数は 51 名、提出された研究業績数は 10 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 10 件（延べ 20 件）について判定した結果、「SS」は 6 割、「S」は 4 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 10 件（延べ 20 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 7 割となっている。

(※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和)

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 22 年度から「人文学諸領域の複合的共同研究拠点」としての全国共同利用・共同研究拠点化に伴い、公募型共同研究の導入、共同研究の国際化、外国人研究者の参加、外国研究機関との提携、日中共同プロジェクトの推進、研究成果の英語での出版等を行っている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度の拓本文字データベースや東洋学文献類目等の公開中のデータベースの利用アクセス数は、平均 3,700 万件以上となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第一次大戦に関する共同研究では、国際シンポジウムの開催に合わせて関連する講演会や映画上映会等を開催し、課題公募型共同研究「ヨーロッパ現代思想と政治」研究班は、国内外の政治学者・思想史家を招いてシンポジウムを開催している。また、「雲崗石窟の研究」は日中共同で進められ、成果の中国語版を出版している。人種表象の研究も国際共同研究として進められ、成果を英語で出版し、国際学術誌に取り上げられている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 平成 22 年度から「人文学諸領域の複合的共同研究拠点」としての全国共同利用・共同研究拠点化に伴い、公募型共同研究の導入、共同研究の国際化、外国人研究者の参加、外国研究機関との提携、日中共同プロジェクトの推進、研究成果の英語での出版等を行っている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度の拓本文字データベースや東洋学文献類目等の公開中のデータベースの利用アクセス数は、平均 3,700 万件以上となっている。